# 啄木かるた百首

秋近し！
　電燈の球のぬくもりの
　さはれば指の皮膚に親しき。
――――出典「悲しき玩具」

あさ風が電車のなかに吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る
――――出典「一握の砂」

浅草の夜のにぎはひに
まぎれ入り
まぎれ出で来しさびしき心
――――出典「一握の砂」

朝の湯の
湯槽のふちにうなじ載せ
ゆるく息する物思ひかな
――――出典「一握の砂」

遊びに出て子供かへらず、
取り出して
走らせて見る玩具の機関車。
――――出典「悲しき玩具」

新しき明日の来るを信ずといふ
自分の言葉に
嘘はなけれど――
――――出典「悲しき玩具」

あたらしき心もとめて
名も知らぬ
街など今日もさまよひて来ぬ
――――出典「一握の砂」

あたらしきサラドの色の
　うれしさに、
箸とりあげて見は見つれども――
――――出典「悲しき玩具」

新しき本を買ひ来て読む夜半の
そのたのしさも
長くわすれぬ
――――出典「一握の砂」

曠野ゆく汽車のごとくに、
このなやみ、
ときどき我の心を通る。
――――出典「悲しき玩具」

或る時のわれのこころを
焼きたての
麺麭に似たりと思ひけるかな
――――出典「一握の砂」

あはれなる恋かなと
ひとり呟きて
夜半の火桶に炭添へにけり
――――出典「一握の砂」

呼吸すれば、
胸の中にて鳴る音あり。
　凩よりもさびしきその音！
――――出典「悲しき玩具」

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし
――――出典「一握の砂」

いつとなく我にあゆみ寄り、
　手を握り、
またいつとなく去りゆく人人！
――――出典「悲しき玩具」

いつも逢ふ電車の中の小男の
稜ある眼
このごろ気になる
――――出典「一握の砂」

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ
――――出典「一握の砂」

岩手山
秋はふもとの三方の
野に満つる虫を何と聴くらむ
――――出典「一握の砂」

うす紅く雪に流れて
入日影
曠野の汽車の窓を照せり
――――出典「一握の砂」

愁ひ来て
丘にのぼれば
名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の実
――――出典「一握の砂」

遠方に電話の鈴の鳴るごとく
今日も耳鳴る
かなしき日かな
――――出典「一握の砂」

大いなる水晶の玉を
ひとつ欲し
それにむかひて物を思はむ
――――出典「一握の砂」

己が名をほのかに呼びて
涙せし
十四の春にかへる術なし
――――出典「一握の砂」

かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川
――――出典「一握の砂」

かの家のかの窓にこそ
春の夜を
秀子とともに蛙聴きけれ
――――出典「一握の砂」

かの時に言ひそびれたる
大切の言葉は今も
胸にのこれど
――――出典「一握の砂」

かの年のかの新聞の
初雪の記事を書きしは
我なりしかな
――――出典「一握の砂」

神のごと
遠く姿をあらはせる
阿寒の山の雪のあけぼの
――――出典「一握の砂」

考へれば、
ほんとに欲しと思ふこと有るやうで無し。
煙管をみがく。
――――出典「悲しき玩具」

閑古鳥――
　渋民村の山荘をめぐる林の
　あかつきなつかし。
――――出典「悲しき玩具」

汽車の窓
はるかに北にふるさとの山見え来れば
襟を正すも
――――出典「一握の砂」

気の変る人に仕へて
つくづくと
わが世がいやになりにけるかな
――――出典「一握の砂」

君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを
あはれと思へ
――――出典「一握の砂」

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな
――――出典「一握の砂」

今日もまた胸に痛みあり。
　死ぬならば、
　ふるさとに行きて死なむと思ふ。
――――出典「悲しき玩具」

霧ふかき好摩の原の
停車場の
朝の虫こそすずろなりけれ
――――出典「一握の砂」

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな
――――出典「一握の砂」

こほりたるインクの罎を
火に翳し
涙ながれぬともしびの下
――――出典「一握の砂」

こころよき疲れなるかな
息もつかず
仕事をしたる後のこの疲れ
――――出典「一握の砂」

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ
――――出典「一握の砂」

不来方のお城の草に寝ころびて
空に吸はれし
十五の心
――――出典「一握の砂」

こみ合へる電車の隅に
ちぢこまる
ゆふべゆふべの我のいとしさ
――――出典「一握の砂」

さいはての駅に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき
――――出典「一握の砂」

さらさらと氷の屑が
波に鳴る
磯の月夜のゆきかへりかな
――――出典「一握の砂」

さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聴きつらむ
それだけのこと
――――出典「一握の砂」

潮かをる北の浜辺の
砂山のかの浜薔薇よ
今年も咲けるや
――――出典「一握の砂」

叱られて
わつと泣き出す子供心
その心にもなりてみたきかな
――――出典「一握の砂」

しつとりと
なみだを吸へる砂の玉
なみだは重きものにしあるかな
――――出典「一握の砂」

師も友も知らで責めにき
謎に似る
わが学業のおこたりの因
――――出典「一握の砂」

しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな
――――出典「一握の砂」

しんとして幅広き街の
秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにほひよ
――――出典「一握の砂」

水晶の玉をよろこびもてあそぶ
わがこの心
何の心ぞ
――――出典「一握の砂」

吸ふごとに
鼻がぴたりと凍りつく
寒き空気を吸ひたくなりぬ
――――出典「一握の砂」

砂山の砂に腹這ひ
初恋の
いたみを遠くおもひ出づる日
――――出典「一握の砂」

宗次郎に
おかねが泣きて口説き居り
大根の花白きゆふぐれ
――――出典「一握の砂」

そのかみの学校一のなまけ者
今は真面目に
はたらきて居り
――――出典「一握の砂」

その頃は気もつかざりし
仮名ちがひの多きことかな、
昔の恋文！
――――出典「悲しき玩具」

その昔
小学校の柾屋根に我が投げし鞠
いかにかなりけむ
――――出典「一握の砂」

高山のいただきに登り
なにがなしに帽子をふりて
下り来しかな
――――出典「一握の砂」

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕
――――出典「一握の砂」

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず
――――出典「一握の砂」

たんたらたらたんたらたらと
雨滴が
痛むあたまにひびくかなしさ
――――出典「一握の砂」

手套を脱ぐ手ふと休む
何やらむ
こころかすめし思ひ出のあり
――――出典「一握の砂」

手も足も
室いつぱいに投げ出して
やがて静かに起きかへるかな
――――出典「一握の砂」

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる
――――出典「一握の砂」

何処やらに沢山の人があらそひて
鬮引くごとし
われも引きたし
――――出典「一握の砂」

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花
――――出典「一握の砂」

はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢつと手を見る
――――出典「一握の砂」

馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に
――――出典「一握の砂」

晴れし空仰げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きてあそびき
――――出典「一握の砂」

人がみな
同じ方角に向いて行く。
それを横より見てゐる心
――――出典「悲しき玩具」

ひとしきり静かになれる
ゆふぐれの
厨にのこるハムのにほひかな
――――出典「一握の砂」

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく
――――出典「一握の砂」

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな
――――出典「一握の砂」

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ来て
妻としたしむ
――――出典「一握の砂」

長く長く忘れし友に
会ふごとき
よろこびをもて水の音聴く
――――出典「一握の砂」

なつかしき
故郷にかへる思ひあり、
久し振りにて汽車に乗りしに。
――――出典「悲しき玩具」

何事も金金とわらひ
すこし経て
またも俄かに不平つのり来
――――出典「一握の砂」

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし
――――出典「一握の砂」

何となく、
今年はよい事あるごとし。
元日の朝、晴れて風無し。
――――出典「悲しき玩具」

西風に
内丸大路の桜の葉
かさこそ散るを踏みてあそびき
――――出典「一握の砂」

庭のそとを白き犬ゆけり。
ふりむきて、
犬を飼はむと妻にはかれる。
――――出典「悲しき玩具」

寝つつ読む本の重さに
つかれたる
手を休めては、物を思へり。
――――出典「悲しき玩具」

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに
――――出典「一握の砂」

よく叱る師ありき
髯の似たるより山羊と名づけて
口真似もしき
――――出典「一握の砂」

よごれたる手を洗ひし時の
かすかなる満足が
今日の満足なりき。
――――出典「悲しき玩具」

夜寝ても口笛吹きぬ
口笛は
十五の我の歌にしありけり
――――出典「一握の砂」

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のことなど
思ひ出づる日
――――出典「一握の砂」

わがために
なやめる魂をしづめよと
讃美歌うたふ人ありしかな
――――出典「一握の砂」

わかれ来てふと瞬けば
ゆくりなく
つめたきものの頬をつたへり
――――出典「一握の砂」

頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず
――――出典「一握の砂」

まれにある
この平なる心には
時計の鳴るもおもしろく聴く
――――出典「一握の砂」

みぞれ降る
石狩の野の汽車に読みし
ツルゲエネフの物語かな
――――出典「一握の砂」

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな
――――出典「一握の砂」

目の前の菓子皿などを
かりかりと噛みてみたくなりぬ
もどかしきかな
――――出典「一握の砂」

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ
――――出典「一握の砂」

病のごと
思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも
――――出典「一握の砂」

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり
――――出典「一握の砂」

やはらかに積れる雪に
熱てる頬を埋むるごとき
恋してみたし
――――出典「一握の砂」

制作　盛岡出版コミュニティー